

幼児期の英語学習経験は有効か

— 非単語反復課題を用いた検討 —

関口 道彦 ・ 湯澤 正通

Effects of early childhood experience of English on English learning ability:
Examination by nonword repetition tests.

Michihiko Sekiguchi and Masamichi Yuzawa

非単語反復課題とは初めて聞いた言葉(非単語)を口に出して言う能力を測定する課題である。Gathercole, Willis, Baddeley, & Emslie(1994)は英語の音韻体系に基づいて構成された幼児・児童用非単語反復課題(Children's test of nonword repetition: 以下CNRepとする)の成績が、英語を母語とする子どもの言語に関する能力と密接な繋がりを持っていると述べた。本研究は日本語を母語とする幼児を対象として、英語の学習経験の有無とCNRep成績との関連性を調べることを目的とした。平均月齢60か月の幼児28名に対してCNRep, および本研究で作成した日本語の非単語反復課題を実施した。その結果、英語の学習経験を持つ幼児は、そうでない幼児に比べてCNRep成績および日本語の非単語反復課題の成績が高いことが明らかになった。このことから、英語の学習経験はCNRep成績を高める可能性が示唆される。しかし、英語の学習経験が日本語の非単語反復課題の成績とも関係していることから、英語と日本語の両言語の能力に共通する要因(例えば、言語能力・英語の学習が可能な家庭環境・保護者の養育態度など)が存在する可能性も考えられる。

キーワード: 言語, 英語, 学習, 幼児, 非単語反復

目的

非単語反復課題とは、実際には単語として存在しない音の羅列(非単語: 例えば「ばみらくけ」や、「barrazon」といったもの)を聴覚呈示し、それを即時再生(反復)させる課題である。一般的に乳幼児期はそれまでには聞いたことのない単語(音韻の組み合わせ)を聞くという体験にあふれており、それらを模倣して発音するという行動は、乳幼児のごく自然な反応である(Snow, 1981)。非単語反復課題はそのような日常的な言語行動を実験的に再現した課題である。Gathercole, Willis, Baddeley, & Emslie (1994)は、英語の音韻体系に基づいて構成された幼児・児童用非単語反復課題(Children's test of nonword repetition: 以下CNRepとする)の成績が子どもの言語学習における多くの

重要な側面と繋がりを持っており、CNRep が言語能力の発達の指標として利用可能であると述べた。

言語能力の指標としての非単語反復課題

標準データ Gathercole et al. (1994)は、イギリスの4歳0か月から9歳11か月までの幼児・児童を対象に、CNRep を実施し標準化を行った。その結果、4歳から8歳までの間で、平均得点は3点から4点程度ずつ一定に増加し、各年齢範囲においては、得点が平均値を中心にほぼ正規分布に従うことがわかった(Table 1)。

Table 1 CNRep の標準化データの概要
(Gathercole, Willis, Baddeley, & Emslie (1994)から引用, CNRep の満点は40点)

年齢範囲 (歳:月)	N	Mean	SD	センタイル得点				
				10th	25th	50th	75th	90th
4:00-4:11	142	18.70	6.02	11	15	19	23	26
5:00-5:11	84	21.39	6.24	13	16	21	26	30
6:00-6:11	128	24.56	6.10	16	20	25	29	32
7:00-7:11	113	28.40	6.15	21	25	29	33	35
8:00-8:11	129	32.30	3.95	27	30	33	35	37
9:00-9:11	16	32.87	4.33	29	30	33	36	38

言語障害を持つ子どもの非単語反復課題成績 Gathercole & Baddeley(1990)は、非言語性知能は標準的であるが、言語発達に障害がある子ども6名(生活年齢は7歳2か月から8歳10か月までの範囲で、平均は8歳6か月)を対象に、非単語反復課題を実施し、その成績を言語能力のマッチング群(平均生活年齢は6歳6か月)、および非言語性能力のマッチング群(平均生活年齢は7歳8か月)と比較した。その結果、言語発達に障害がある子どもは、2つのマッチング群の子どもより非単語反復課題の得点が低く、その水準は生活年齢が4歳の子どもと同程度であることがわかった。したがって、非単語反復課題の成績は言語の障害の有無を判断する指標として利用できると考えられる。また、この研究で使用された非単語は1音節から4音節までのものであったが、1音節と2音節の非単語に対する得点に関しては言語発達に障害を持つ子どもと2つのマッチング群の間に差はなく、3音節と4音節の非単語に対する得点は言語発達に障害を持つ子どもの方が低かった。すなわち、言語発達に障害がある子どもは、より長い刺激に対する反応に問題を抱えているということである。このことは、言語の障害とは、ワーキングメモリにおいて音韻を表象する能力に問題があることに由来するという見解を支持するものである(Gathercole & Baddeley, 1990)。

他の言語能力との関係 非単語反復課題の成績は他の言語能力と密接に関連している。Gathercole, Willis, & Baddeley(1991)は、4歳児(平均年齢4歳9か月, N = 57)と5歳児(平均年齢5歳9か月, N = 51)を対象に、CNRep と語彙テスト(The Short Version of the British Picture Vocabulary Scale)および読みテスト(British Abilities Scales の下位項目のひとつ)を実施し、CNRep の成績と2つの言語能力との間に概ね高い相関があることを明らかにした。すなわち、4歳児における CNRep 成績と読みテスト成績との間にのみ有意な相関がなかったが、それ以外の相関は全て有意であった。

また、同様の関連性の有無について8歳児($N = 80$)を対象として調べた Gathercole, Willis, Emslie, & Baddeley(1992)は、8歳児においても CNRep 成績と語彙テスト成績との間、および CNRep 成績と読みテスト成績との間に有意な相関があることを見出した。このことより、非単語反復課題は言語能力の指標としての有用性をもっていると言えるであろう。

しかし、これらの研究はいずれも英語を母語とする幼児を対象として行われたものであり、英語を第二言語(外国語)とする幼児の CNRep 成績と英語の能力との関係性については検討されていない。新奇な単語を模倣するという幼児の言語行動を利用した非単語反復課題は、母語の発達の指標としてだけでなく、第二言語の発達の指標としても有用なのではないだろうか。そこで、本研究は、日本語を母語とする幼児を対象として、英語の学習経験を持つ子どもとそうでない子どもとで、非単語反復課題の成績に違いがあるかどうかを明らかにすることを目的とする。

Gathercole et al. (1994)は、非単語反復課題に関係する認知的なプロセスとして長期的な記憶の利用を挙げている。英語の学習経験を持つ子どもは英語に関する長期的な記憶を持っていると考えられるため、そうでない子どもに比べて CNRep の成績が高いと推測される。しかし、Gathercole et al. (1994)は同時に、非単語の音韻を分析し正しい表象を作る過程もまた非単語反復課題に影響すると述べている。そのため本研究では、英語の音韻体系に対する慣れを考慮して、チャンツと呼ばれる遊び歌を聴いて練習するという英語音韻訓練を要因に組み込むこととした。

また、非単語反復の能力があらゆる言語に共通するものなのか、それとも個々の言語に固有の能力であるのかを明らかにするため、日本語の音韻体系に基づいた非単語反復テスト(以下、JNRep とする)を作成し、CNRep の成績との関連性を検討することとした。

方法

参加者 参加者は東広島市内の私立保育園に通う幼児 37 名であった。確認された聴覚障害を持っている者はいなかった。プリテスト時の月齢は 44 か月(3歳8か月)から 78 か月(6歳6か月)までの範囲で、平均月齢は約 60 か月(約 5 歳)であった。

ただし、以下の理由により 9 名を分析の対象から除外した。3 名は、プリテストが行われてからポストテストが行われるまでの間に退園したため除外した。3 名は、実験を途中で辞退したため除外した。1 名は、プリテストにおける CNRep 得点が、平均値から 2.5SD 以上離れていたため、外れ値と判断して除外した。2 名は後に述べるマッチング作業の後に、ペアとなった対象が上記のいずれかの理由により分析対象から外れたため、群の等質性を保持する目的で除外した。以上の 9 名を除外した後も、月齢の範囲と平均月齢に変化はなかった。

実験計画 $2 \times 2 \times 2$ の 3 要因配置を用いた。第 1 の要因は英語音韻訓練の有無、第 2 の要因は英語学習経験の有無、第 3 の要因はテスト時期とした。第 1 と第 2 の要因は被験者間変数で、第 3 の要因は被験者内変数であった。

英語音韻訓練の有無に関しては、プリテストにおける CNRep 成績と英語学習経験の有無によってマッチングを行い、訓練あり群と訓練なし群に無作為割り当てを行った。ただし、マッチング後

の参加辞退と退園(計2名)により、群の等質性が崩れたので、それぞれのマッチングペアであった2名も分析対象から除外した。その結果、訓練あり群は14名(そのうち英語学習経験ありは8名)、訓練なし群は14名(そのうち英語学習経験ありは4名)になった。両群の等質性を確認するために、月齢・CNRep プリテスト得点・JNRep 得点について t 検定を行い、英語経験の有無について χ^2 検定を行った。その結果、いずれにおいても有意な差はなかった(結果は順に、 $t(26)=0.10, ns.$; $t(26)=0.05, ns.$; $t(26)=0.49, ns.$; $\chi^2(1)=2.33, ns.$)。

刺激・装置 CNRep の刺激は、Gathercole & Baddeley (1996) に付属のカセットテープから、コンピュータ (SONY PCG-C1VSX/K) に音声を取り込み、小型のアンプ付きスピーカ (RMS-10) を用いて呈示した。刺激は2音節から5音節までの非単語40語(各音節数ごとに10語ずつ)で構成されていた(Appendix 1)。

JNRep の刺激は、齊藤・齊藤・吉村(2000)の作成した非単語を用いて、24語から成るリストを2系列作成した(Table 2)。その際、2モーラから5モーラまでの各モーラ数において、聴覚呈示時の単語らしさの評定値(齊藤他, 2000)が同程度になるようにした。系列(2水準)とモーラ数(4水準)を要因とする2要因分散分析で単語らしさの評定値を比較したところ、系列の主効果、モーラ数の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった(結果は順に、 $F(1, 40)=0.01, ns.$; $F(3, 40)=0.25, ns.$; $F(3, 40)=0.00, ns.$)。この非単語リストを系列内で無作為に並べかえ(Appendix 2)、日本語を母語とする女性が読み上げたものをコンピュータに録音し、呈示刺激とした。呈示する装置は CNRep と同じものを用いた。

CNRep・JNRepとも、採点には Gathercole & Baddeley (1996) と同じ方法を用い、正確に反復でき

Table 2 JNRep の各系列に属する非単語とその単語らしさの評定値
(齊藤他(2000)の作成した非単語の単語らしさの評定値を系列間・モーラ数間で同程度になるように統制した、各非単語の下線部はアクセント位置)

第1系列											
2モーラ 単語らしさ 評定値 SD			3モーラ 単語らしさ 評定値 SD			4モーラ 単語らしさ 評定値 SD			5モーラ 単語らしさ 評定値 SD		
びが	2.23	1.33	るほさ	1.97	0.71	かとぼう	2.17	1.24	のまやわん	1.97	1.08
せけ	2.47	0.96	ねほふ	2.43	0.92	ゆぜかし	2.33	0.98	きおざしら	2.07	1.15
でじよ	2.50	1.15	とえし	2.67	0.98	じりょうち	2.63	1.33	がくまりや	2.37	1.08
へお	2.73	1.09	そみや	2.83	1.24	ちらもら	2.80	1.25	のぬんなれ	2.63	1.14
すこ	3.13	1.12	だれん	3.20	0.95	げんろぬ	3.07	1.06	しよまのり	2.87	1.23
とゆ	3.17	1.39	うせい	3.25	1.23	りくさい	3.20	1.33	やまりきょう	3.70	1.10
平均	2.71		平均	2.73		平均	2.70		平均	2.60	

第2系列											
2モーラ 単語らしさ 評定値 SD			3モーラ 単語らしさ 評定値 SD			4モーラ 単語らしさ 評定値 SD			5モーラ 単語らしさ 評定値 SD		
れへ	2.13	0.96	ぎよむけ	1.93	0.96	ぬあゆら	2.07	0.89	ぐきんめつ	2.03	0.88
ぬよ	2.27	0.93	わへさ	2.37	1.02	さへもさ	2.23	0.92	ぎわげんさ	2.13	1.18
りに	2.67	1.11	ざぬつ	2.63	0.05	のまきぬ	2.60	0.95	どりほたつ	2.33	1.35
みゆん	2.83	1.29	こるむ	2.87	1.09	べいげん	2.80	1.40	じやりまよう	2.80	1.22
きや	3.10	1.01	ばぎよう	3.20	1.42	じようらい	3.00	1.32	あいどうし	3.37	1.08
けさ	3.13	0.81	やみつ	3.37	1.20	はちめの	3.33	1.16	だんそりよう	3.43	1.38
平均	2.69		平均	2.73		平均	2.67		平均	2.68	

た場合を1点、それ以外を0点として採点した。

英語音韻訓練には、松香フォニックス研究所(2002)の作成したCDに収録されているチャンツから3つを用いた(Appendix 3)。チャンツとは遊び歌のことで、本研究で用いたチャンツは英語圏で長い間歌い継がれているものであった。音声の呈示にはCNRepおよびJNRepと同じ機材を用いた。また、当該チャンツの歌詞と、それと併せて掲載されている絵をA3版(横)の紙にカラーコピーしたものを用意し、訓練を行うときに視覚呈示した。

課題 CNRepおよびJNRepでは、参加者は聴覚呈示される非単語を聴き、それを模倣して発音するという課題を行った。英語音韻訓練は、参加者が聴覚呈示されるチャンツを聴いて、実験者と共にその模倣の練習をするという形式で行われた。

手続き 課題は全て1対1の個別面接形式で行った。参加者はスピーカを前にして座り課題に臨んだ。課題は、はじめに全ての参加者に対してJNRepとCNRepプリテストを行い、その後、平均約51日の間をあけて、英語音韻訓練(訓練あり群のみ)とCNRepポストテストを行うという順序で実施した。

CNRepとJNRepでは、スピーカから聞こえてくる非単語を反復するという旨の教示に続いて、練習試行を行った。練習用課題は本試行で使用されていない非単語で構成され、CNRepでは2試行(1音節から成る非単語)、JNRepでは8試行(2モーラから5モーラまでの非単語、各2語)を行った。参加者が課題の求める内容を理解したところで、本試行へと移行した。すべての非単語は3秒のインターバルをあけて呈示した。参加者が3秒間で反応できないときは、刺激の再生を一時停止し、反応が為されたら再開した。反応に対しては、正否を明確に示さない相槌(「いいよ」、「上手だよ」など)を行った。また、反応できなかったり、わからないという旨の反応をした場合には、それでも問題はないということを示す相槌(「大丈夫だよ」など)を用いた。

採点は、実験者が反応に対して逐次的に行い、記録した。

反応の正否に関わるフィードバックは、実験中は行わなかったが、実験後にフィードバックを求められた場合は、実際の成績の如何に関わらず、全体的によくできていたという旨の回答を行った。

英語音韻訓練では、英語の歌がスピーカから流れるので、はじめはそれを聴き、次にスピーカから聞こえてくるのに合わせて、歌ってみようという旨の教示を行った。3種類のチャンツは、一定の内容が、2回から4回繰り返されてひとまとまりとして構成されており、このまとまりを2回連続で呈示した。原則として、まとまりの中の1回目は聴き、2回目以降で歌うこととしたが、参加者が歌うことに困難を示した場合には、歌うことを強制せずに、聴くだけでもよいという旨を伝えた。

CNRepの所要時間はプリテスト・ポストテストともにおよそ4分、英語音韻訓練の所要時間はおよそ5分、JNRepの所要時間はおよそ2分30秒であった。

結果

Table 3は英語音韻訓練・英語学習経験・テスト時期の水準別にCNRepおよびJNRepの正答率と

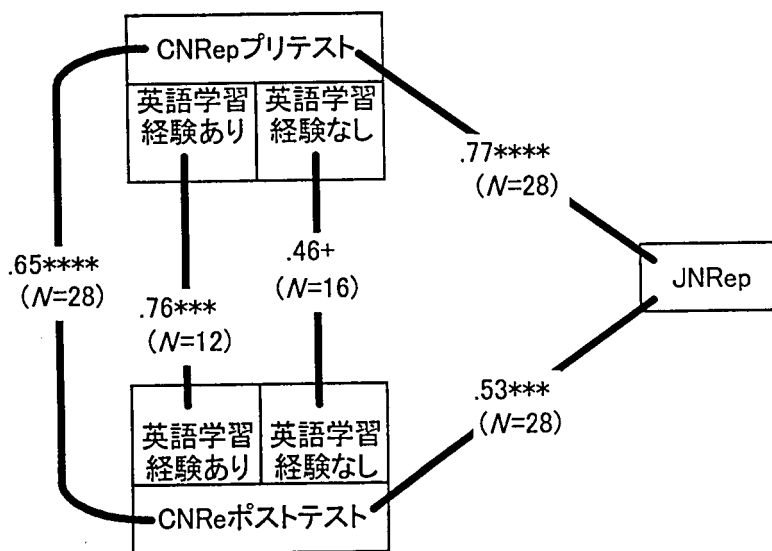
標準偏差を表したものである。CNRep の正答率に関して、英語音韻訓練・英語学習経験・テスト時期を要因とする 3 要因分散分析を行った結果、英語学習経験の主効果のみが有意 ($F(1, 24)=4.46, p<.05$) で、英語学習経験を持つ参加者の方が、そうでない参加者よりも、CNRep の平均正答率が高かった。

また、JNRep の正答率に関して、英語学習経験の有無を独立変数とする t 検定を行った結果、英語学習経験のある参加者の方が、そうでない参加者よりも平均正答率が有意に高かった ($t(26)=2.12, p<.05$)。

Figure 1 は実施した各テスト得点の間の相関関係を図にしたものである。CNRep に関しては全体で考えた場合と、英語学習経験の有無で分けて考えた場合の両方を表示した。無相関検定の結果、

Table 3 要因別の CNRep と JNRep の平均正答率
(括弧内の値は標準偏差)

		CNRep プリテスト	CNRep ポストテスト	JNRep
英語学習経験 あり	音韻訓練あり (N=8)	12.8% (8.05)	9.4% (5.41)	15.0% (9.24)
	音韻訓練なし (N=4)	19.4% (9.90)	16.9% (7.78)	
英語学習経験 なし	音韻訓練あり (N=6)	10.0% (9.35)	6.7% (4.71)	9.2% (7.33)
	音韻訓練なし (N=10)	8.8% (5.09)	10.5% (4.49)	



+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$, **** $p<.001$

Figure 1 各テストの相関関係と無相関検定の結果
(CNRep については全体と英語学習経験の有無に分けて表示してある)

英語学習経験のない参加者における CNRep プリテスト成績と CNRep ポストテスト成績の間の正の相関が傾向であった他は、全て有意な正の相関であった。英語学習経験のある参加者における CNRep プリテスト成績と CNRep ポストテスト成績の相関と、経験のない参加者における CNRep プリテスト成績と CNRep ポストテスト成績の相関の強さを比較した結果、英語の学習経験がある参加者の相関が有意に強かった ($\chi^2(2)=8.64, p<.05$)。

考察

本研究の目的は、日本語を母語とする幼児の英語学習経験の有無が CNRep 成績と関連するかどうかを明らかにすることであった。

英語の学習経験は有効か

英語の学習経験を持つ幼児はそうでない幼児に比べて CNRep 成績が高かったことから、幼児期の英語学習経験が CNRep の成績を上げる可能性を持つことがわかった。長期的な記憶が利用可能なことによって CNRep の成績は上昇する (Gathercole et al., 1992) ため、英語の学習経験のある子どもは高い CNRep 成績をとることができると考えられることは可能である。しかし、本研究における英語の学習経験の有無の要因は介入的な操作によるものではないため、厳密には英語の学習経験が CNRep に影響を及ぼすという因果関係が存在するとは断定できない。

本研究においては英語の学習経験を持つ幼児はそうでない幼児より JNRep 成績が高いという結果が得られた。すなわち英語の学習経験の有無は CNRep および JNRep の両方と関連しているということである。英語の学習経験の有無が英語の音韻体系に基づいて構成された非単語反復課題の成績と関連するということは論理的な整合性の高い現象であるが、それに対して、英語の学習経験の有無と日本語の音韻体系に基づいて構成された非単語反復課題の成績とが直接的に関連するとは考えにくい。したがって、その2つの変数を媒介する要因や、あるいはそれらを同時に説明する要因が存在する可能性が考えられる (例えば、言語能力、英語の学習をさせることのできる家庭環境、保護者の養育態度といった要因など)。実際、CNRep 成績と JNRep 成績との間には強い正の相関があったことから (Figure 1)、2つの非単語反復課題には大きな共通点があると考えられる。その共通部分と英語の学習経験との間に関連があるとすれば、英語の学習経験が2つの非単語反復課題と関連をもっていることが説明できるであろう。

JNRepの標準化

Figure 1 に示したような相関関係が明らかになったことにより、JNRep も他の言語能力と密接な繋がりを持っていることが予測される。今後、日本語の語彙テスト・読みテストの成績と JNRep 成績との間の関連を明らかにし、大規模な JNRep の実施によって標準化を行うことができれば、CNRep と同様に、日本語を母語とする幼児の日本語の発達指標として JNRep を使用することが可能になるだろう。ただし、本研究で作成した JNRep の全体の正答率が 78.1% ($SD = 10.9$) であったことは標準化を行う上で考慮しなくてはならない。CNRep は Gathercole & Baddeley (1996) によって4歳から8歳までを対象に標準化されており、その年齢の範囲で得点が分布するように作られている。

本研究の JNRep は、参加者が 3 歳から 6 歳で、Gathercole & Baddeley (1996) に比べて年齢の範囲が低いにもかかわらず、得点の分布は高い方向に偏っている。すなわち、本研究で作成した JNRep は難易度が低かったと考えられる。この問題を解消するために、現在 2 モーラから 5 モーラまでの非単語で構成されている本テストに、よりモーラ数の多い非単語を加えたり、非単語の読み上げ速度を変えたりといった改編を行う必要があると考えられる。

引用文献

- Gathercole, S. E., & Baddeley, A. D. (1990). Phonological memory deficits in language disordered children: Is there a causal connection? *Journal of Memory and Language*, **29**, 336-360.
- Gathercole, S. E., & Baddeley, A. D. (1996). *The Children's Test of Nonword Repetition*. London: The Psychological Corporation.
- Gathercole, S. E., Willis, C., & Baddeley, A. D. (1991). Differentiating phonological memory and awareness of rhythm: Reading and vocabulary in children. *British Journal of Psychology*, **82**, 387-406.
- Gathercole, S. E., Willis, C., Baddeley, A. D., & Emslie, H. (1994). The children's test of nonword repetition: A test of phonological working memory. *Memory*, **2**, 103-127.
- Gathercole, S. E., Willis, C., Emslie, H., & Baddeley, A. (1991). The influences of number of syllables and word-likeness on children's repetition of nonwords. *Applied Psycholinguistics*, **12**, 349-367.
- Gathercole, S. E., Willis, C., Emslie, H., & Baddeley, A. D. (1992). Phonological memory and vocabulary development during the early school years: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, **28**, 887-898.
- 松香フォニックス研究所 (2002). *I like coffee, I like tea* 東京: 松香フォニックス研究所.
- 齊藤 智・齊藤章江・吉村貴子 (2000). 非単語 120 個の作成とその単語らしさ評定 大阪教育大学紀要, **48**, 263-275.
- Snow, C. E. (1981). The uses of imitation. *Journal of Child Language*, **8**, 205-212.

Appendix 1 CNRepの刺激リスト (Gathercole & Baddeley (1996)より引用)

呈示順序	刺激	音節数	呈示順序	刺激	音節数
練習1	Noop	1			
練習2	Tam	1			
1	dopelate	3	21	pristoractional	5
2	glistening	3	22	underbrantuand	5
3	pennel	2	23	trumpetine	3
4	defermication	5	24	sladding	2
5	contramponist	4	25	commeecitate	4
6	hampent	2	26	tafflest	2
7	reutterpation	5	27	loddernapish	4
8	perplisteronk	4	28	barrazon	3
9	blonterstanping	4	29	commerine	3
10	sepretenial	5	30	empliforvent	4
11	detratapillic	5	31	thickery	3
12	glistow	2	32	voltularity	5
13	frescovent	3	33	versatrantonist	5
14	bannifer	3	34	rubid	2
15	stopograttic	4	35	brasterer	3
16	woogalamic	4	36	diller	2
17	ballop	2	37	penneriful	4
18	confrantually	5	38	bannow	2
19	fenneriser	4	39	prindle	2
20	aotupatory	5	40	skiticult	3

Appendix 2 JNRepの刺激リスト(斉藤他(2000)をもとに作成, 各非単語の下線部はアクセント位置)

練習項目と第1系列

呈示順序	刺激	モーラ数
練習1	ほは	2
練習2	ぼめら	3
練習3	おわぎやそ	4
練習4	さことろん	5
練習5	どたい	3
練習6	ぞり	2
練習7	ぱみらくけ	5
練習8	ぐようど	4
1	るほさ	3
2	のめんなれ	5
3	がくまりや	5
4	うせい	3
5	やまりきよう	5
6	かとぼう	4
7	でじょ	2
8	しとまのり	5
9	げんろめ	4
10	りくさい	4
11	へお	2
12	ゆぜかし	4
13	とえし	3
14	きおざしら	5
15	すこ	2
16	ちらもら	4
17	とゆ	2
18	せけ	2
19	ねほふ	3
20	じりようち	4
21	のまやわん	5
22	そみや	3
23	びが	2
24	だれん	3

第2系列

呈示順序	刺激	モーラ数
1	きや	2
2	ざぬつ	3
3	どりほたつ	5
4	だんぞりよう	5
5	ぬよ	2
6	はちめの	4
7	あいどうし	5
8	ばぎよう	3
9	さへもさ	4
10	ぬあゆら	4
11	けき	2
12	じやりすよう	5
13	じょうらい	4
14	やみつ	3
15	のまきね	4
16	わへさ	3
17	みゆん	2
18	べいげん	4
19	れへ	2
20	ぎわげんさ	5
21	ぐきんめつ	5
22	りに	2
23	こるむ	3
24	ぎよむけ	3

Acca bacca soda cracker〈誰の番か神様のいう通り〉

Acca bacca soda cracker,
Acca bacca boo.
Acca bacca soda cracker,
Out goes you!

Liar, liar〈うそつき, うそつき〉

(1) Liar, liar, pants on fire,
Hanging on a telephone wire.
(2) Liar, liar, pants on fire,
Nose as long as a telephone wire.

Ice cream〈アイスクリームが食べたい〉

I scream,
You scream,
We all scream for ice cream!